

登場人物

正春(まさはる) 大学生。瑞穂の彼氏。これと

いった特徴のない地味な男。

格闘技好き。

瑞穂(みずほ) 大学生。正春の彼女。ライトブ

라운のふんわりミディアム

ヘア。大人しく優しい清楚系。

るな 瑞穂の友達。瑞穂達と同じ大学。黒髪ツ

インテールのオタク系女子。

颯(はやて) 爽やか金髪イケメン。

鉄雄(てつお) 短髪マッチョイケメン。

茜色に染まる街並みを、一組の男女が手を繋ぎ仲睦まじく歩いている。大学生カップルの正春と瑞穂だった。同じ大学に通う二人は、講義で隣に座ったことをきっかけに知り合い、付き合い始めてかれこれ一年近くになる。

正春の方はなんの変哲もない地味な男だが、彼女の瑞穂は他人が羨むレベルの女性といって差し支えなかった。毛先がやや巻き髪になったライトブラウンのミディアムヘアーは見惚れるほどにふんわり綺麗で、若干離れ目でタレ目な感はあるが、その容貌はとても愛らしい。スタイルも良く清潔感のある色白で、おまけに隠れ巨乳ときている。

正春にとって、瑞穂は正に自慢の彼女といえた…。

「そこできー！その悪役レスラーがパンツから

凶器を取り出したんだよ！スパナっていの？あの痛そうなやつ。俺、もうびっくりしちゃってさ！」

「うんうん」

「それでその後どうなったと思う？なんとかな！」

正春は先程から、手を繋ぐ瑞穂に延々プロレスの話聞かせていた。正直瑞穂は格闘技に興味などないのだが、嫌な顔一つしないどころか、せっかく自分に話してくれているのだと、とても嬉しそうに彼氏の話に耳を傾けていた。柔らかな笑みを浮かべながら。彼氏が機嫌良く話せるよう適宜小気味良い相槌も挟みつつ。

こういう日常の何気ない場面にも、瑞穂の性格の良さは滲み出る。大人しく控え目で、彼氏思いで聖母のように優しい。正春が初彼氏で、交友関係も広くなく、男友達もいないので浮気

の心配もまるでない絵に描いたような超清楚系。本当によくこんな彼女をゲット出来たものだ。と、正春はつくづく思うのだった。

「うんうん……へえー！それはすごいね！」

「そうだろ？見ててついエキサイトしちゃってさ！それで…あ、ちよつと俺ばつか喋りすぎかな？」

瑞穂の深い優しさは、正春も重々自覚している。ふと我に返り、彼は彼女に言う。

「次は瑞穂の話聞かせてくれよ。俺だけ話して申し訳ないから」

「へえ？いい、いいよ。私は正春くんの話聞かせてもらうだけで、とても楽しいし、幸せだよ」

「いいから、いいから。瑞穂の好きな音楽の話。聞かせてくれよ」

瑞穂は音楽好きで、日本のコアなバンド事情にも詳しくかった。人生で音楽にまるで触れてこ

なかった正春は、瑞穂の影響で近頃音楽に興味を持ち始めていた。丁度瑞穂が二人で格闘技を見してくれるようになったのと、同じ具合に。露骨に初心で自分でも照れ臭いが、正春はこういった関係を、とても心地良く思っていた。

「え〜。う〜ん。じゃ、じゃあねえ…最近買ったCDなんだけど…」

「うんうん」

なんだかんだで嬉しそうに話し出す瑞穂。タレ目気味の愛くるしい顔を笑みに染めて。次第に茜色が濃くなる住宅街を、二人は変わらず歩いていった。ずっと、手を繋いだまま。

※※※

「はあ…んんっ…ああ！」

「ああ！瑞穂！瑞穂！ふうん！」

「あ…ああ…正春くん…あ…あああん♥」

コンドームが装着された正春の一物が、瑞穂の濡れた肉穴を行き来する。一人暮らしの瑞穂の部屋。ベッドの上。正春はシンプルな正常位で彼女を抱いていた。二人とも、生まれたままの姿で。

講義が終わると、いつも二人は同じ電車に乗り帰路につく。正春はまず彼女を部屋まで送り、さらにそこからバスに乗って家族と暮らす家へと帰る。これが二人の日々のルーティンだった。だが、今日のように心が自然と寄り添った日は、どちらから誘うでもなく、当たり前のように彼女の部屋で体を重ねた。

「はあ…んん…ああ♥…ああ♥」

正春の眼前で揺れる瑞穂の白い顔が、初々し

い羞恥に赤く染まる。完全に、正春しか男を知らないと言断言出来る反応だった。

正春はそのことを何度も何度も脳内で反芻し、とても安心していた。何故だかはわからないが、こういった不可解な心の動きが、彼女を抱く度に正春の中に浮きあがってきた。正春にとっても瑞穂は初めての女性だが、彼女にとって自分が唯一の男性であるということが、正春の無意識の部分でとても重要らしいのだ。

「ああ！正春くん！ああ♥もうダメ！だめええん♥い…イツちゃいそう！んんっ！」

「はあ！瑞穂！瑞穂！」

（…瑞穂は俺しか男を知らない…これまでも…そして…これからも…）

獣のように激しく腰を振りながらも、心の一部をひどく冷静に保ち、正春は繰り返しそれを確認していた…。

俺の性格最高清楚系彼女が

色んな男と

浮気パコパコしまくりの

最凶クソビッチだった件

032

この作品はフィクションです。

実在の人物・団体・事件等とは関係ありません。

また、登場人物は全員十八歳以上です。

「え、そ、それって、ご、合コンってこと？」

大学の学食で、瑞穂はつい素っ頓狂な声をあげてしまう。友人の『るな』と、昼食中だった。

対面して座る二人の間のテーブルには、女の子らしい質素なランチメニューが並んでいる。正春がいない時、瑞穂は大学ではこの仲の良い友人と過ごすことが多かった。

「い、いや、合コンってほどのことじゃないよ。ちよ：ちよつと：男女二対二で食事するってだけで…」

るなは、年齢にしては若干痛々しい感もあるダサイ黒髪ツインテールの、オタク系の女の子だった。前髪はぱつつんで、高い位置で結んだツインテールが、胸の辺りまで伸びている。目が細く、どこかメンヘラっぽい雰囲気もある。口調もその内面を表すように、どこかおどおど

している感があった。

「それで、もう一人の予定してた女の子が、どうしても来れなくなっちゃって、み、瑞穂ちゃんに来てほしいんだよ。お願い。私、他にあってなくて。時間も無いから、もう断るわけにもいかないし」

「でも…そんな…男の人と食事なんて…私…彼氏だっているし…っていうか…そもそも…」

その食事に彼氏持ちの自分を誘うことだけでも充分違和感があるのだが、それ以前に、るな自身にもれつきとした彼氏がいるのだった。オタクで地味なるのだが、何故か異性の知り合いが異様に多く、彼氏に隠れてそういった場にもよく赴いているらしいのだ。彼氏一筋の瑞穂には、全くもってそれが理解し難かった。

まんまオタクな見た目のるなに対して、明るいブラウンのふんわりヘアーをお洒落に決め

た瑞穂の方が、一見は今時女子なのだが、この友人の派手な私生活には、瑞穂の方が驚かされる立場なのだった。

「そもそも…るなちゃんだって…彼氏いるんだし…それって…う…浮気になっちゃうんじゃないのかな？」

「へ？浮気？な、ないない！全然そういうことじゃないよ！た、ただ一緒にご飯食べるってだけだから、ホントに！わ、私、そういうの今までホントに一度もないから…ほ、ほら…これが写真、め、めっちゃイケメンで、瑞穂ちゃんのタイプだと思うよ、この人…」

るなはテーブルに少し身を乗り出し、スマホを瑞穂に見せてきた。食事を予定している二人の男性の内の一人なのだろう。そこにはシックな金髪をした、絵に描いたような爽やかイケメンの姿があった。

(うわ…ホントにすごいイケメン…)

瑞穂は不覚にも内心でこぼしてしまふ。

「…ね？いいでしょ…この人？」

「う…うん…それは…まあ…」

「でしょ？絶対瑞穂ちゃんのタイプだと思っ
た♪あはは！」

「……………」

嬉しそうに笑う、るな。何故彼女が瑞穂の男性の趣味をピンポイントに把握しているのかというと、そもそも二人は、それで意気投合して仲良くなったからだった。

るなと瑞穂は、無類のイケメン好きだっ
た。いつも二人でこっさり、イケメン談義に花を咲かせていた。もつとも、その対象は、アイドルやミュージシャンやネットのインフルエンサーなどの有名人が主だったが(るなはオタクなので、二次元のイケメンキャラも含まれる)。

音楽好き女子の瑞穂は、決してその音楽性だけで好きなバンドを選んでるわけではなかった。メンバーにストライクゾーンの男性が一人でもいれば、音楽性や演奏技術はそっちのけで節操なく胸がキュンキュンときめいてしまう。

無論このことは正春には隠していた。瑞穂を純粋な音楽ファンと信じる正春には、シヨックが大きい事実だろう。だから瑞穂は彼氏の前ではイケメンなんかにはまるで興味のない清純女子を演じていた。彼氏思いの優しさを遺憾なく発揮して…。

イケメンに関心のない女子なんていない。女というものはそんな男に都合良く出来てなどいない。残念ながら、多かれ少なかれ、女はイケメンが好きなものなのだ…。

（はあ…で、でも…ホントにカッコイイな…こ

の人…)

スマホの中の見知らぬイケメンに、瑞穂はつい見惚れてしまう。

「…こ、この人に会えるんだよ…こんなカッコイイ男の人と…お、お話出来るんだよ…ね？だから一緒に行こうよ、食事会…う、浮気とかじゃないから…絶対そんなじゃないから…」

るなが、囁くように瑞穂に言う。オタクな彼女からは聞いたこともないような、魔性の女のような声で…。

「……ゴクッ」

(……う…浮気じゃない…絶対…浮気じゃない…ただ…ご飯…ご飯…食べるだけ…それだけ…ああ…ま…正春くん………ご………ごめん…)

「……うん…わ…わかった…」

瑞穂は小さく、コクリと頷いていた。それは、

ほんの小さな決断に過ぎなかった。

「あは♪ありがとう：楽しもうね、瑞穂ちゃん」
るなは細い目の奥の瞳を輝かせ、ニヤツと口
元を歪めた。アダムとイブをたぶらかした、蛇
のようだった…。

※※※

「それでき、その格闘家つてのがさ、動画配信
とかもしてる今風の選手なんだけど…」

「う…うん…」

大学からの帰路。いつものように手を繋いで
歩く二人。そして普段と変わらず、ご機嫌に自
分の好きな格闘技の話をまくしたてる正春。彼
は話に夢中になるあまり、隣にいる彼女の微妙

な変化に気づいていなかった。その相槌に、
んで心が込もっていないことに…。

（はあ…正春くん…ごめんなさい…）

瑞穂は気が気ではなかった。元来興味の薄い
格闘技の話など、頭に入ってくるはずもない。
あの日から数日。いよいよ明日、件の食事会が
開催されるのだった。

（ああ…どうしよう…本当にどうしよう…も
う明日になっちゃった…もう……逃げられな
いよ…）

ところが瑞穂は、まるで乗り気ではないのだ
った。むしろ憂鬱で仕方なかった。完全に自分
の意思で、友人からの誘いを受けたはずだった。
だが、イケメン好きとはいえ、本来彼氏一筋、
貞操観念も強い瑞穂である。あの時はどうい
うわけか勢いで承諾してしまったものの、時間を
置くと、切り裂かれるような罪悪感に襲われた。

決して浮気ではない。それに該当する行為に及ぶつもりなど毛頭ない。断じてない。絶対にない。だが、彼氏に黙ってそういう場に行くといっただけで、充分すぎるほどの裏切りなのではないか。

地獄の業火で身を焼かれるような良心の呵責に苛まれ、瑞穂はあれから数日ずっと悶々と懊悩していた。眠れない夜さえあった。だが、一度自分から承諾してしまった以上、ドタキャンして友人を困らせるわけにもいかない。

（正春くん…もし私が他の男の人と食事するって知ったら…どう思うんだろ…やっぱり…すごく…哀しむのかな…）

恐る恐る、瑞穂は手を繋ぐ彼氏の横顔を覗き見る。なにも知らない彼は、いつも通りの能天気な笑顔を浮かべている。その顔を見ると、ズキッと胸が痛んだ。

「そのハイキックがさあ…ん？どうしたの、瑞穂？俺の顔なんてじっと見て？」

正春が瑞穂の視線に気づいた。そしてじっと彼女を見返す。瑞穂は自分の心の奥底まで、彼に見透かされているのではと、錯覚してしまう。「いや、その、な、なんでもないの。…そ、それでどうなったの、その試合？続き聞かせて」「へ？ああ、それでな…」

瑞穂は慌てて誤魔化した。そして、いつもの物分かりの良すぎる理想的な彼女の仮面を被った。

(…正春くん…本当にごめんなさい…)

心の中で、何度も謝罪しながら…。

※※※

翌日の夜、逃げられない瑞穂は、初対面の男性との、二対二の食事会に赴いた。一応礼儀と、いうことで、青系統の落ち着いたブラウスと、大人っぽいタイトなスカートで、めいっぱいオシャレして。先端がくるつと巻き髪になったライトブラウンのふんわりヘアも、しつかりセツトして。メイクも万全にして……。場所は、瀟洒な香り漂う、それなりに高級そうなダイニングバー。やけに薄暗い店内で、結構すいていた。周囲に他に客のいないテーブルで、るなと瑞穂は、男達と対面した。

こういう大人びた店で食事すること自体、純朴な瑞穂にとっては初めてだった。緊張しながらたどたどしい会話を進めている内に、男達はお酒を勧めてきた。拒否するわけにもいかず、皆で飲むことになった。すると、場は俄然碎け

た雰囲気になる。最近飲める年齢になったばかりの瑞穂は、戸惑いながらもグラスを傾けていった。アルコールの力で、頭がとろんとしていくのを、充分自覚しつつ…。

「……はあ」

（ああ…なんかやっぱり慣れないなあ…こういう場…）

それでも完全にはリラックス出来ない瑞穂。一方…。

「マジ？興味あんの？じゃあ今度連れてってやるよ！俺車あるから、ドライブがてら一緒に行こうぜ！」

「え、い、いいんですか？ぜ、是非！」

「………」

（…るなちゃん…なに言ってるのよ…ホントにもう…）

瑞穂の隣の席のるなは、先程から正面に座る

男性とやたら会話を弾ませていた。後日のデートの約束らしきものまで、早々と取り付けてしまおう始末…。

男性はワイルドなタンクトップを着た短い黒髪のマッチョな人で、名前を鉄雄といった。男くさい感じだが充分にイケメンだった。勝気なオラオラ系というか、明らかに、るなに対し積極的にグイグイいつていた。るなと男性二人も、決して深い面識があるわけではなく、間にいる共通の友人の計らいで、本日の食事はセツティングされたらしい。つまり、やはりこの食事は、出会い目的の合コンの色合いが濃かったのだ。

それにしたって、先刻からの、るなの態度は瑞穂には解せない。

「わ、わあ！た、楽しみだな！わ、私、ドライブって大好きなんです！」

「おお、いいじゃんいいじゃん！どこでも好き
なところ連れてってやるよ！わはは！」

「わー！嬉しい！ど、どうしよう！きゃは♥
」

るなは、正面の鉄雄に露骨に科を作り、媚び
た女のあさましい表情を浮かべている。彼女に
は、正式な彼氏がいるのだ。それも随分長くち
やんと付き合っている。複数人での食事会だけ
ならまだしも、個別に他の男性とデートなんか
しちや、絶対にダメだろう。

一見地味な陰キャの彼女に、こういった一面
があるのは薄々気づいていたが、いざ眼前にま
ざまざと突きつけられ、瑞穂は友人として非常
にショックだった。るなはいつもの痛々しいツ
インテールと、少女趣味がすぎるゴスロリ系の
服装で、話し方もオタクっぽいきよどきよどし
た感じを消せていない。そんな普段の彼女のま

ま、正反対の性的な女の一面を倒錯的に見せられるものだから、瑞穂はなにか胃がもたつくような不快感を覚えてしまう。

(…もう…なによ、るなちゃん…最低じゃない…)

いきおい、瑞穂のグラスを傾けるペースもあがってしまふ…。

「……………」

元来あまり飲めない瑞穂にとっては充分濃いカクテルを喉に流し込みながら、彼女は何の気なしに視線を正面に向ける。そしてつい思ってしまう。

(……………はあ…やっぱりカッコイイんですけど…)

そこには、あの日、るなのスマホで見た例の金髪爽やかイケメンが座っていた。名前を颯(はやて)といった。実物の彼も写真の通り、い

や、写真以上の美形で、思わず息を飲むほどだった。

(で…でも私は…見てるだけだから…るなちやんとは違うから…浮気とかしないし…)

少しずつ少しずつ酔いが回ってくる頭で、なにかの言い訳をする瑞穂…。と、その視線に気づいて颯が言う。

「ん？どうしたの、瑞穂ちゃん？僕の顔になにかついてるかな？」

「い、いえ！な、なんでもないです、すみません！」

「い、いや、そんな謝ることなんてないけどさ。

あはは。…それより、瑞穂ちゃん。さっきから随分勢い良いけど、あんまり飲みすぎちゃダメだよ。気をつけてね？」

「あ、はい…あ…ありがとうございます…」

(…ああ…優しい…颯さん…❤)

颯は見た目のイメージ通り、とても感じの良いおらかな男性で、瑞穂は先程からいくらか会話を交わしているが、極めて好印象だった。鉄雄も颯も瑞穂達より年上の社会人で、なんの仕事をしているのかはよくわからないが、目に見えて大人な雰囲気を漂わせていた。るながこういう人達とお近づきになるルートを持っている事実が、意外で仕方なかった。

(…私は違うし…絶対そういうんじゃないし…)

懸命に理論武装に挑みつつも、徐々にこの場の雰囲気に関心をほどこかれていく瑞穂。その時、隣の二人の会話が耳に入る…。

「……………い…ぬ…て…なあ……………だろ…」

「……………り…た…よ…こんで…」

潜めるような小声だったので、るなと鉄雄がどんなやり取りをしていたのか、はっきりとは

わからない。だが彼女達はその会話の直後、申し合わせたように二人して席から立ち上がったのだった。そして身を寄せ合い、なにも言わずどこかに行ってしまった。

別の場所で二人きりで話すということだろうか。このまま店を出て戻らないということはないと思うが、この時点で瑞穂にとっては充分考えられない。さすがにありえない。どういふつもりなのか。いよいよ瑞穂のはらわたは煮えくり返る。

（マジなんなの、あの子！最低！彼氏いるのに！クソビッチじゃん！）

そんな瑞穂の逆巻く怒りを感じ取ったのか、向かい合って座る颯がフォローするように言う。

「…ごめんね…瑞穂ちゃん…鉄雄のやつ…なんとというか節操がなくて…気分を害したなら

謝るよ」

「い、いえ、そんな！は、颯さんが謝ることじゃないですよ……こちらこそ……るなちゃんが申し訳ありません……」

瑞穂はそれに乗じて、るなに対する鬱憤をつい吐き出したくなり、口にしてしまう。

「本当に……あの子が悪いんですよ……じよ、常識がないっていうか……あの子……ちゃんと彼氏いるんですよ……それなのに……あ……ありえなくな……いですか？彼氏の気持ちとか考えたら……普通あんな無責任な行動しませんよね……ど……どう思いますか、颯さん……」

「うん……まあ……そうだね……」

「……わ……私も彼氏いるから……こ……こういう場に来ちゃったのは……その……私も……いけないんですけど……それでも彼氏に対する申し訳なさみたいなものは……それなりに持っているつもり……」

りなんです…浮気なんて絶対しないし…それなのに…あの子ったら…あんなに真っ赤になって浮かれちゃって…オタクのくせに…ホントありえない……はあ！す、すみません、颯さん！変なこと言っちゃいました！」

調子に乗って、好き勝手愚痴をまくしたててしまった。さぞやみつともなかったことだろう。だが目の前の爽やか金髪イケメンは、変わらず包容力溢れる穏やかな笑みを浮かべていた。そして言った。瑞穂の目を見て。

「ううん。全然いいよ、気にしないで。ふふふ。

…それに僕は…瑞穂ちゃんがそういう子ってわかってよかったよ…なんていうか…上手く言えないけど…君が…浮気する人に怒りを覚えるような…ちゃんと…彼氏を一途に思っている女性で…素敵な女性で…本当によかった…」

「……………」

(……………颯さん)

今日は、決して褒められた集まりではなかっただろう。けれど、この颯という人物に出会えたことだけはよかったと、瑞穂は率直に思った。こんな素敵なお男性に、出会えて本当によかった……。

「……………はあ……………ゴクツ」

(ああ……………ヤバい……………やっぱ酔ってるわ……………私……………)

なんとなく、瑞穂は居心地の悪さに包まれる。しばしするとそこへ丁度助け船のように、るなと鉄雄が戻ってきた。だが、彼女達はまたしても瑞穂に不快感をもたらす。なんと鉄雄が、るなの肩を抱き、二人は恋人のように仲睦まじく密着していたのだ。

(はあ？マジなんなん、この女？)

二人は席には戻らず、瑞穂の前で立ち止まっ

女オタク、るなは続ける。瑞穂の目をグッと直視したまま。

「そ…それで、ぎ、ザーメンは！が、ガッツリゴツクリ飲み干して参りました！はあ！お、美味しかったです！こ、こ、この店のどんな料理よりも！い、一番美味しかったです！」

「ぎゃはは！すげー！ホントにやりやがった、このオタクブス女(笑)。なは！じゃあこの後どうするのかも、ちゃんと友達に報告しとけ！きちつと敬礼決めて！はい、ゴー！」

「は、はい！び…ビシッ！け…敬礼！る、るな！彼氏持ち女るな！ドスケベ浮気女るな！や、ヤリマンオタクメンヘラ女るな！はあ…こ、これから彼氏以外の男と！ら…ラブホに行つて参ります！そして彼氏以外の男と！ば、バッチリファック決めて参ります！か…彼氏のじやないチンポを！はあ…バッチリマンコに決

めて参ります！」

「はあ：ああ：」

あまりの状況に、無様な喘ぎさえ漏らしてしまふ瑞穂…。

「なはは！じゃあそういうことだから、あと頼むな、颯。おらいくぞ、るな！パコりにいくぞ！初めて会ったその日の内にパコりにいくぞ！がはは！」

「はあ！はあい♥鉄雄さまあ〜♥るな、パコられまあ〜す♥今日初めて会った男性に♥その日の内にパコられまあ〜す♥」

るなは、再び鉄雄に肩を抱かれ、彼女の方から男の体にしなだれかかるように抱き着き、行ってしまった。瑞穂の脳裏に、その表情が印象的に残った。傲慢極まる男に倒錯した発言を強制され、頬を赤くして悦んでいる、ドM女のそれだった…。